

## 水俣学研究センターのタイ調査がもたらしたもの ～ペンチョム・セータンさんに聞く

土井 利幸

特定非営利活動法人 メコン・ウォッチ、水俣学研究センター客員研究員

ペンチョム・セータン

タイ・生態的警鐘と回復財団 (EARTH)、水俣学研究センター客員研究員

### I. はじめに

熊本学園大学水俣学研究センター（以下、センター）のタイ調査は現地は何をもたらしたか。その答えを出すにあたって、タイ・生態的警鐘と回復財団のペンチョム・セータンさん（以下、通称でエーさん）の見解は欠かせない。エーさんは2006年3月から6月、センターの客員研究員として水俣に滞在した。その際センターの研究者にタイの産業公害について伝え、これが調査のきっかけとなった<sup>1)</sup>。調査ではタイ側でつねに中心的役割をはたし、現在にいたるまで調査や水俣での経験を活かしながらタイの公害問題に取り組んでいる<sup>2)</sup>。そこで本稿では、エーさんへの聞き取りを通してセンターのタイ調査を振りかえってみたい<sup>3)</sup>。

### II. 背景

センターの調査の中心となったタイ東部ラヨーン県のマプタブット（以下、MTP）工業団地は、1990年、東部臨海工業地帯の一部として完成し、沖合で採掘する天然ガスを利用する石油化学産業が集積した。やがて、大気や地下水の汚染が顕在化し、2000年代、エーさんら市民団体（NGO）が汚染物質の情報公開を求める「住民の知る権利」のためのキャンペーンを展開した。東部臨海工業地帯には日本が多額の政府開発援助（ODA）を投入した経緯があり、その責任を問う目的で私もエーさんらの活動に協力した<sup>4)</sup>。

センターは2008年3月の予備調査を起点に、10月、MTP工業団地周辺で住民への聞き取りや結果報告会を実施した。折しも翌2009年9月、タイ中央行政裁判所が、健康影響評価（HIA）などを義務付けるタイ2007年憲法67条第2項を根拠に、工業団地での新規事業を一時差止めた<sup>5)</sup>。この判決の影響が日系企業にも及ぶため日タイのメディアが注目し、センターの調査や水俣病についても取りあげた<sup>6)</sup>。センターは2009、2010、2012年と、住民に加えて政府・企業・大学関係者への聞き取り、水質検査、公開フォーラムでの報告といった活動を重ねた。訪問先も拡大し、とくに2015年以降は東北部ルーイ県ナノンボン村周辺で金採掘による環境破壊を調査するほか、2016年9月にはバンコクで、水俣病公式確認60周年を冠

する国際会議をチュラロンコン大学などと共催した<sup>7)</sup>。

### Ⅲ. エーさんが振りかえるセンターのタイ調査

私はエーさんへの聞き取りを、「MTPをはじめタイの住民は、センターの調査をどう受けとめたか」という質問から始めた。

「とても歓迎したと思います。MTPの住民はセンターの研究者に出会って、水俣を身近に感じられたようです。自分たちも同じような被害に遭うかも知れないと、水俣について真剣に学ぼうとしていました。被害は恐ろしいが、何とかしようと取り組むセンターの研究者に会って励まされたと思います。タイの研究者の支援を得られずに失望していましたし。ルーイ県の住民も同じ反応でした。」

「センターの研究者からは、汚染への関心だけでなく住民へのいたわりを感じました。村内を歩き、地元の暮らしに興味を示し、村の行事にも参加しながら、水俣での経験をもとに助言しようとする姿が住民の心に響いたと思います。住民への接し方も印象的でした。MTPで水質を検査したときには、住民に簡易検査キットを渡して検査の目的や方法を説明し、自分たちでもやってみよう促しました。『われわれは専門家で、あなたたちは住民だ（だから、われわれに任せなさい）』という態度は感じられませんでした。」

ではセンターの調査は、タイ社会全体の公害防止にも寄与したのだろうか。

「間接的に寄与したと思います。たとえば公開フォーラムを開いて、政府や企業関係者にセンターの研究者の話を聞いてもらいました。リスクコミュニケーションの件はとくに有効でした<sup>8)</sup>。それまで気に留めていなかった政府が、リスクコミュニケーションを汚染の監視に活用しようと考えはじめました。」

この件では、最近（2025年9月）大きな動きがあった。エーさんらが提出したPRTR（化学物質排出移動量届出）法案がタイ国会下院を通り、PRTRの制度化に向けて大きく前進したのである<sup>9)</sup>。

さて、「公開フォーラム」は、タイ政府が研究者とNGOとの関係のあり方を見直す機会にもなったようだ。

「公開フォーラムに出席した政府関係者は、センターの研究者と私たちとの協力関係に感心していました。必要な時だけ研究者を呼びだすといった表面的な関係を超えて、お互いに学びあいながら、価値ある結果を生んでいると映ったようです。」



図1 タイ東北部ウドンタニ県で、ポタッシュ（カリウム塩）採掘に反対する地元住民と交流するセンターの調査チーム。  
2010年9月

出典：土井利幸撮影

「こういう関係が生まれた要因は双方にありました。センターの調査のきっかけはMTPでの産業公害の実態と日系企業の関与への関心でしたが、MTPを訪れた時点から関心の範囲は広がり、地元の伝統や移住労働者の流入にも及びました。センターの知見を活かすには、地元住民や私たちから学ぶ必要があったわけです。それで、センターと私たちの関係がより対等になったのだと思います。」

「一方、当時の私たちは、タイ以外の経験から学ぶ必要に迫られていました。タイの産業公害は複雑化し、それまでの知識や経験では対応しきれず、学際的な知識や多様な手段を身に付ける必要がありました。それで、センターの調査からできるだけ多くを吸収したかったのです。」

ここで私はエーさんに、調査の印象的な場面を思い出してもらった。

「水俣病のすさまじさを語る時、みなさんが率直だったことです。タイの住民は環境汚染について知らされません。政府が知らせないからです。でも、住民が被害の全貌を知らなければ過ちの再発は防げません。」

「それから、先にも触れた、住民への接し方です。宮北隆志先生は、ナノンボン村の綿織物の伝統がいたく気に入ったようで、村の工芸品をひろく日本の市民にも紹介することで、女性たちの現金収入や伝統技術の継承を支援しようとされました。先生に限らず、センターのみなさんが村の暮らしを大切に、辛い食事でも楽しんでくれました。そして、一旦調査となれば真剣に取り組む姿が印象的でした。」



図2 MTP工業団地で、水路の水を採取するセンターの調査チーム。2010年9月

出典：土井利幸撮影

少し視野を広げて、水俣での滞在は、エーさんの現在の活動にどう役立っているのだろうか。

「患者のみなさんをはじめ北九州・京都・東京などでNGO関係者から話を聞き、自分の活動を見直すことができました。当時は『代替産業のためのキャンペーンネットワーク』（以下、CAIN）という団体を率いて、産業公害に関する情報や分析をタイ社会に広めていたのですが、多くの住民から被害の話を聞くにつけ、キャンペーンでは不十分だと考えるようになっていました。高い専門性が必要だと思ったのです。」

「厳密な分析には優秀な人材が要り、そのためには資金をきちんと運用できる組織も必要です。この点、中地重晴先生と石田紀郎先生<sup>10)</sup>が環境監視研究所<sup>11)</sup>を立ち上げた経験はとても参考になりました。中地先生に教えてもらった簡易な汚染測定方法は、タイ各地で環境モニタリングをはじめの際に役立っています。そうしたアイデアをもとにCAINを改組し、2009年、『タイ・生態的警鐘と回復財団』（以下、EARTH）を設立したのです<sup>12)</sup>。」

さらにエーさんの話は、原田正純先生との思い出に及ぶ。

「水俣を離れる日が迫るなか、谷洋一さんの協力で、ようやく原田先生にインタビューする機会ができました。それで熊本学園大学まで行って一室で待っていると、講義を終えた先生がやってきて、言いました。『ほくにインタビューする人は、まず、ほくの講義を40分聞く規則になってるんだ。』私はよろこんで先生の講義を聞きました。先生はスライドを使いましたが、水俣病患者の臍の緒の画像になると研究室に戻り、ほどなく、乾いた臍の緒が入った小箱を40ほども持ってきて、こう言いました。『このおかげで、ほくは胎児性水俣病を突きとめたんだよ。』最後に先生は『水俣病の説明に使いなさい』と、私にスライドのコピーをくださいました。若いときにご自身で撮った写真を載せた貴重なスライドです。」

「それから先生は私や谷さんを夕食に招き、途中で水前寺公園に寄りました。でも閉園時間が過ぎていて、谷さんが頼んでも職員は頑として入れてくれません。ところが先生が歩みよって何か言うと、職員は通してくれたのです。そして先生に、園内をくわしく案内していただきました。あとで先生は、『あなたが水俣へ調査に来て、明日にもタイに帰る。その前に日本流のおもてなしを見せてはどうか、と言って職員を説得したんだよ』と種を明かされました。」

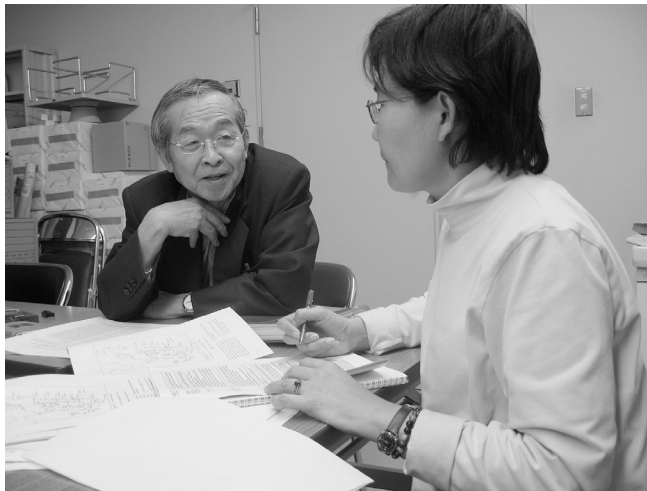


図3 熊本学園大学で、原田先生の話聞くエーさん。  
2006年

出典：Darunee Paisanpanichkul 撮影

エーさんには、原田先生にどうしても聞きたい質問があったのだそうだ。夕食の席で、その質問をすることになった。

「私は尋ねました。『先生は高名な医師としてお金も稼げたろうに、なぜ水俣病に一生を捧げたのですか。』先生の答えはこうでした。『怒りがぼくを駆り立ててね。何としても患者に手を差しのべようという気になったんだよ。当時は海辺の村に行くのも山をいくつか越えなけりゃならなかった。そうやって、ようやく患者の家族がぼくに臍の緒を託してくれて、おかげで胎児性水俣病を突きとめることができたんだ。』夕食後にご自宅に招かれ、奥さまにも紹介を受けました。奥さまには庭で育てた白いバラを見せてもらい、お茶もいただきました。こうして原田先生へのインタビューを終えたのですが、あの日の感動は今も私の心に刻まれたままです<sup>13)</sup>。』

「原田先生だけでなく、水俣で闘うたくさんの人に出会いました。谷さんとパートナーの伊東紀美代さん、娘の谷由布さんも忘れられない存在です<sup>14)</sup>。アイリーン・美緒子・スミスさんには京都のご自宅に泊めてもらい、お話を聞きました。患者のみなさんとの出会いも忘れられません。とくに坂本しのぶさんと母親のフジエさんのお話には深い感銘を受けました。」

こうした体験を通して、エーさんは水俣学をどう捉えているのだろうか。

「私にとっての水俣学は、産業公害の包括的な研究方法です。水俣病は水銀だけでなく多くの要因が複合して起こった悲劇です。水俣病の発生をそれらの要因の相互関係の中で捉え、全体像を把握することで、ようやく被害者の救済が可能になります。『水俣学』の『水俣』は、あらゆる公害の代名詞で、したがって水俣学は日本以外でも有効です。また、産業公害に限らず、開発がもたらす環境や社会の破壊に取り組むモデルにもなります。」

「社会の構造的側面にも目を向け、多角的な視点を包摂した、多分野での協力が必要で、それが水俣学の核だと思います。従来の科学を超えた、総合的な視野と方法を備えた科学です。タイの産業公害も、特定の人びとが貧困や差別に苦しみ、周縁化されている社会構造と深く結びついています。なので、私たちの取り組みは社会構造の変革に到達せざるをえません。被害者の苦難をどうにかしようと思うと、包括的に取り組むしかないのです。」

最後に私はエーさんに、センターへの期待を聞いてみた。

「次世代の研究者を育てて、すでに活躍している研究者と力を合わせ、社会に成果をもたらせる活動を持続してほしいと願います。また、タイに限らず世界各地から研究者がセンターを訪れ、さまざまな知見を水俣のみなさんと、そして自分たち同士で共有できれば素晴らしいと思います。私も2026年の水俣病公式確認70周年に向けて、できればEARTHの仲間とともにセンターを再訪したいと思っています。」

#### IV. まとめ

本稿を終えるにあたって、センターのタイ調査が現地にもたらしたものを、水俣学の理念に照らしてまとめておきたい。水俣学には、「専門家と素人の壁」・「学問の壁」・「国境」を越え、「現地に学び、現地に返す」という基本理念がある<sup>15)</sup>。エーさんのことばを通して、センターの調査がこの理念を具体化していたことがよく分かる。

さらに、この理念がエーさんを介して、EARTHの活動に継承されたことにも注目したい。現在、EARTHは設立以来の活動を振りかえる作業を進めており、先ごろ（2025年10月）も住民代表など関係者を招いて意見交換会を開いた<sup>16)</sup>。その席で私は、住民代表たちが「多くの方が調査にやってきたが、みんな自分たちの利益のために、住民を支えてくれたのはEARTHだけだった」、「EARTHの調査のおかげで政府と交渉できた」などと明言する場に立ち会った。EARTHが水俣学の根幹である「現地に学び、現地に返す」<sup>17)</sup>を実践している証しだろう。つまりセンターのタイ調査は、それ自体が水俣学の実践であったと同時に、エーさんを媒介して、タイ社会に水俣学を伝える役割を果たしたと言ってよい<sup>18)</sup>。

#### 注

- 1) 詳細は、宮北隆志ほか「マプタプット工業団地の拡張をめぐる諸問題の現状と課題」『水俣学研究』3号、2011年、pp.85-105（とくにpp.86-87）。
- 2) 詳細は、Ecological Alert and Recovery - Thailand (EARTH) ホームページ <https://www.earththailand.org/th/>（最終閲覧2025年10月26日）。
- 3) 聞き取りは2025年9月26日に遠隔で実施し、使用言語は英語。本稿は土井がまとめ、エーさんが英訳で内容を確認した。
- 4) 詳細は、土井利幸「住民たちの不安と希望～タイ・マプタプット石炭火力発電所建設計画～」『フォーラムMekong』7巻1号、2005年、pp.8-10。
- 5) タイでの動きの詳細は、宮北ほか（2011年）前掲（とくにpp.89-95）、土井利幸「マプタプット工業団地判決とその後——特に住民参加をめぐる——」『環境と公害』40巻2号、2010年、pp.45-46。
- 6) たとえば、「タイ、1兆円事業再開へ」『日本経済新聞』2010年9月18日、「水俣病の教訓 タイで生かせ」『西日本新聞』2011年1月1日、TVタイ報道 2011年1月23日（タイ語）。
- 7) MTP調査は、宮北ほか（2011年）前掲（とくにpp.87-89）に、ルーイ調査は、宮北隆志「科学研究費助成事業研究成果報告書：タイ・ミャンマーにおけるクロスボーダーな工業化・人権侵害と域外債務・環境民主主義」、2020年、に報告があるほか、センターが『水俣学研究』の「水俣学研究センター研究活動の記録」やホームページ「国際交流・海外調査：タイ・マプタプット工業団地における被害調査」などで逐次、紹介している。
- 8) 中地重晴「日本における産業開発とリスクコミュニケーション」、報告スライド、2011年。
- 9) EARTH 'Monumental Step, as Thailand Gears up to Have PRTR Law into Effect.' *EARTH Report*, 2025年 <https://earththailand.org/en/2025/09/05/monumental-step-as-thailand-gears-up-to-have-prtr-law-into-effect/>（最終閲覧2025年10月24日）。
- 10) 特定非営利活動法人 市民環境研究所代表理事、元京都大学大学院教授。

- 11) 「環境監視研究所とは」環境監視研究所ホームページ  
<https://www.kankyo-kanshi.org/gaiyo.html>（最終閲覧2025年10月29日）。
- 12) エーさんの日本滞在の報告は、Penchom S. 'Learning from Pollution Campaign Experiences in Japan.' *The Nippon Foundation Fellowships for Asian Public Intellectuals, Are We Up to the Challenge? --- Current Crises and the Asian Intellectual Community*, 2008年、pp.95-107。
- 13) エーさんは2012年6月にバンコクで原田先生を追悼した際にも、この時の思い出を紹介している（「故原田医師 タイでも追悼」『西日本新聞』2012年6月29日）。
- 14) 谷・伊東一家については、熊本県民テレビ「水俣病支援に“新世代”の光 旗に『怨』の文字掲げデモした時代から変わる支援のあり方、若者が共感抱くきっかけに」2024年9月18日  
<https://news.yahoo.co.jp/articles/e97fd4410b29b4e7ca27cc0f68b517481a2a1f4c?page=1>  
（最終閲覧2025年10月25日）。
- 15) 花田昌宣「解説」、原田正純『いのちの旅「水俣学」への軌跡』岩波書店、2016年、pp.201-222（とくにp.216）、花田昌宣「水俣学研究の課題と水俣病事件の現在」『水俣学研究』11号、2022年、pp.43-52、熊本学園大学水俣学センター・ホームページ「水俣学の基本理念」。
- 16) EARTH「健康と環境を求めて産業公害と闘う住民への支援活動の評価と知識マネジメント」、会合資料、2025年10月14-15日（タイ語）。
- 17) 花田（2016年）前掲p.216。
- 18) MTPでは、住民が今も大気・水汚染や漁業被害を訴えつづけている。Environmental Justice Foundation (EJF) 制作のドキュメンタリー（*Unmasked*、2024年）は、プラスチックの大量消費が石油化学産業の需要を生むとの点から、MTP工業団地周辺の現状を描いている（タイ語／英語字幕）。<https://www.youtube.com/watch?v=cx60gohfJ2g&t=4s>（最終閲覧2025年10月26日）。一方、ルーイ県ナノンボン村の住民らは、2018年に裁判で勝訴。金採掘は止まったが、企業の破産などにより賠償や原状回復は遅れている。Thai PBS「前進～金採掘からの生活再建」2024年3月1日（タイ語）<https://www.thaipbs.or.th/program/KhunLao/episodes/100303>（最終閲覧2025年10月24日）を参照。